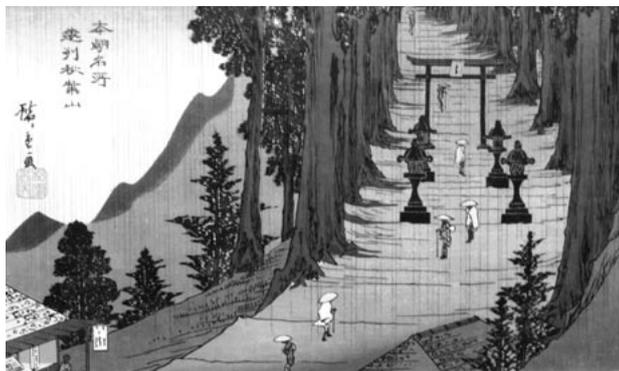


新たな交流の創造

はじめに

かつて浜松は東海道の宿場町として、また、徳川家康公が29歳から17年間苦節の時代を過ごした浜松城の城下町として栄えた。



歌川廣重「本朝名所遠州 秋葉山」

出展・秋葉山本宮秋葉神社

平成24年、浜松市は市制施行100周年という大きな節目を迎えた。これを記念し、「街道がつなぐ歴史・絆・未来」をテーマとした全国街道交流会議第8回全国大会「浜松大会」が開催された。東西軸を成す新東名高速道路や新たな南北軸として期待される三遠南信自動車道の整備が今まさに進んでいる。新たな交通結節点となる浜松市にとって、古来より街道がはぐくんできた歴史から学び、地域と地域、人と人との絆から未来の発展を描くことは、新たな100年の創造に向けた重要な試みである。人と人の交流の中心を担ってきた街道、視点を変えて観光資源として活用し、街道を軸に観光資源を結び付け、ネットワーク化していくことで

地域経済の発展へとつなげていく「街道観光」が当会議で提唱された。

秋葉街道の成り立ち

かつて「塩の道」と呼ばれ、太平洋と日本海を結ぶ物流の道でもあった秋葉街道は、東海道から千国街道、三州街道を結んでいる。明治初期の国土地理院の地図では国道並みの主要幹線道路として示され、人々の往来が多かったことを物語っている。

縄文時代には塩や黒曜石など、生活に欠かせない物資が運ばれた道であり、戦国時代には天下統一を夢見る武将たちが辿った戦国の道でもある。江戸時代には火防の神として広く信仰を集めた秋葉山に通じる参詣道でもあった。

はままつ
浜松市長

すずきやすとも
鈴木康友



江戸時代は江戸をはじめとする人口集中地区が再三大火に見舞われたこともあり、日本各地から参拝する人々の思いが石仏、常夜灯として寄進され、夜にはかがり火が焚かれ旅人の道標となった。



最も古い十八町目の町石



三尺坊山門

こうして秋葉街道は、物流とともに先人たちの往来を通じた交流により歴史と文化が醸成され発展した。

再びの秋葉街道へ

秋葉街道には、魅力あふれる資源が現在でも数多く残されているものの、全国の中山間地域同様、担い手不足になっている。

本市では、中山間地域の活気を取り戻すべく、その一環として街道を新たな観光資源として取り入れようと取り組んでいる。平成24年度に浜松市観光アドバイザーとして街道観光の第一人者である須田寛氏（東海旅客鉄道株

相談役）を迎えるとともに、街道観光を活用した地域づくりセミナーの開催、秋葉街道を活用した観光ツアーの造成など、街道を軸に魅力あふれる資源を地域と地域、人と人との絆により結び付けていくことに取り組んでいる。これらの取り組みを通じて、地域づくり、まちづくりへとつなげていきたい。

前述したとおり、東西軸を成す新東名高速道路や新たな南北軸として期待される三遠南信自動車道の整備が今まさに進んでいる。また、本市では三遠南信地域（愛知県東三河地域、長野県南信州地域、静岡県遠州地域）の自治



浜松・掛川・鳳来から九里にあたる「九里橋」

体の広域連携により、三遠南信地域連携ビジョン推進会議を設置し、県境を越えた交流の推進と一体的な圏域の発展を目指す取り組みも推進している。本市の取り組みが、新たな街道の整備と相まって、新たな交流を生み、新たな歴史と文化を創造していくことを期待する。

一口メモ

火防の神々秋葉山々と全国を結んだ信仰の道

秋葉信仰のおこりは、奈良時代の末から平安時代のはじめのころに、秋葉寺の前身である大登山霊雲院が創建されたのが始まりとされている。やがて、嵯峨天皇の命により七堂伽藍が建立されて、秋葉山秋葉寺と改名。その後の修験道の広まりによって、修験道の道場ともなっ

いった。さらに、江戸中期以降には、秋葉講により秋葉信仰が全国的に広まった。

秋葉山への参詣路は、浜松から入る道のほか、東海道掛川、袋井から入る道もあった。また、三州御油から入り、本坂峠を越え気賀の関所を通過して秋葉山に到る道と、三河の

新城・大野を経て舞木峠や峰峠を越えて遠州に入る道、および信州八重河内から南下し、青崩峠を越えて秋葉山に到る道や、奥三河・信州から浦川を経て秋葉に到る道など、三方、四方から通じていたとされる。



新城・大野を経て舞木峠や峰峠を越えて遠州に入る道、および信州八重河内から南下し、青崩峠を越えて秋葉山に到る道や、奥三河・信州から浦川を経て秋葉に到る道など、三方、四方から通じていたとされる。

企画協力…全国街道交流会議「街道交流首長会」



秋葉山本宮秋葉神社